

ポイント16 「隣りの子を見習え」は止めましょう

「言わぬ」に勝る言い方

「言わぬは言うに勝る」ということで、雄弁の銀に対して「沈黙は金」の諺があります。しかし、言葉は、適切に使

われるならば、これほど価値の高いものはありません。

だから、本当は「言わぬは言うに勝る」であってはならないのです。沈黙が金であるならば、ダイヤモンドのような輝きを持った言葉の使い方をしたいものです。

例えば、子供が学校へ通うようになり、成績簿を家に持ち帰った時、それについて言う親の言い方が二通りあります。

「八十点か。これ位の点で満足してはだめよ。もっと頑張って、今度は百点を取って来なさい」

「お母さんはね、よく百点を取ったものよ」というのがその一つです。

「まあ八十点。よくやったわね。偉いわね。でもお母さんはね、お前のことだからきっとこれ位はやる、と思っていたわよ」という言い方がその二です。どちらの言い方が子供にとってやる気を起こさせるでしょう。

もちろん後者です。前者の言い方をされたらやる気が起きるところか、意気消沈です。

また、前者のような言い方をする母親は、百点を取って来たら満足するかと言いますと、決してそうではありません。「それでお隣りのちゃんは何点だった？」とか、「百点取った子何人くらいいた？」とか言って尋ねます。

わが子だけが百点だったということだと満足しますが、もしも「お隣りのちゃんも百点だった」「百点を取った子が大勢いた」と聞きますと、途端に不満な顔になります。

もしも反対に、お隣りのちゃんが百点で、わが子が八十点だったらどう言うでしょう。「お隣りのちゃんはえらいわね。お前もちゃんを見習って、同じように百点を取らないと恥ずかしいでしょ」と言います。

親は子供を奮起させようと思って言うのですが、こういう言い方は奮起させるどころか、子供にやる気をなくさせるものです。それは子供の立場に立って考えたものではありません。子供に親の愛情を感じさせる言葉でなければ効き目はないのです。